



宮城学院と「初週祈祷会」——押川方義を介して——

松本 周

宮城学院の前身である「宮城女学校」が136年前に設立された。仙台の地にいかなる経緯によりキリスト教を基盤とする学校が建設されたのか。創立に重要な役割を果たした一人である押川方義の人生を辿っていくと、横浜における「初週祈祷会」の出来事へ到達する。宮城学院のキリスト教の源流ともいえる、初週祈祷会について確認し、それが歴史の中で有した意味、現在の宮城学院にとって持つ意味を考えたい。

2022年と150年前の諸事

宮城学院の名称であり所在地である宮城県に関連して、日本近現代史を回顧する機会となる事柄が2022年に二つあった。

一つは夏の全国高等学校野球選手権大会において、深紅の大優勝旗が白河の関を越えたことである。社会的な注目度は高いといえ、高校スポーツの一種目での東北勢初優勝が日本近現代史と結びつくのは「白河の関」に込められた思いである。戊辰戦争での敗戦以後、薩長土肥を主体とする明治政府側から「白河以北一山百文」と言われたのが東北の地だったからである¹。その意味で白河の関を越えるとは単に物理的あるいは地理的な事象としてだけではなく、日本近現代史において東北に向けられた蔑視や抑圧をはね返すといった象徴的意味をも有した。

もう一つは、宮城県150年を迎えたことである。「宮城県は、1872年（明治5年）2月16日（旧暦1月8日）、旧仙台藩を中心とする「仙台県」から改称する形で成立し、2022年（令和4年）2月16日に誕生150周年を迎えました。」²これは明治政府が中央集権的な行政遂行のために「県」を設置し、旧来の「藩」を廃止するという「廃藩置県」の国家政策により実施された。

そして2022年に150年を迎えた諸事を観察していくと、興味深いことに「近現代日本のかたち」とでもいった形姿が浮かび上がってくる。前述した宮城県成立にも看取され

¹ 宮城県の地方紙「河北新報」の題号はここに由来する。「明治維新いらい東北地方は「白河以北一山百文」と軽視されていた。河北新報は「東北振興」と「不羈独立」を社是として1897（明治30）年1月17日に創刊された」（毎号1面に掲載）。

また、同じく2022年夏の選手権大会で準決勝に進出した、聖光学院高校（福島県伊達市）校歌と宮城学院とのつながりについては稿を改めて記す機会を持ちたい。

² 宮城県150周年記念特設サイト <https://miyagi150th.pref.miyagi.jp/150years/> 2023.1.9 最終確認

る中央集権的な国家政策は「琉球処分」としても実行された。「一八七二年九月、王府は「維新慶賀使」派遣の要求に応じて、王族の伊江王子を正使とする使節団を東京へ派遣した。明治天皇と謁見した慶賀使一行は、その場で国王尚泰を「琉球藩王」として冊封する詔書を渡され、琉球は外務省の管轄となる。「冊封」という東アジアの伝統的な国際関係を模した形で、明治政府（天皇）と琉球（藩王）の関係性が明確化されたのである。」³ この結果、歴史的に東アジア諸国・諸地域の結節点の役割を果たしてきた琉球から、日本の「沖縄県」へと位置づけが変わっていった。

2022年は「鉄道150年」を記念した年でもある。「日本の鉄道は新橋〔現在の汐留〕～横浜〔現在の桜木町〕から始まったが、その前1872（明治5）年6月12日（太陽暦、以下同）、品川～横浜間で先行（仮）開業していた。この時は1日2往復（翌日から6往復）で途中無停車、品川発9時、17時、横浜発8時、16時で両駅間の所要時間は35分であった。……同年10月14日、晴れて新橋～横浜間が正式開業となり、翌15日（14日は式典のみ）から一般営業が開始された。新橋～横浜間に1日9往復。」⁴これを端緒としてやがて日本全国に鉄道網が巡らされた現在の状況へと至ったのである。もっとも現在では全国的な鉄道ネットワークにおいて乗車人員の少ない路線の存廃が社会的課題となっている。この点についてはキリスト教の状況とも関連させつつ後述することとしたい。

そして本稿との関連で注目したい150年がある。2022年7月15日に『横浜海岸教会一五〇年史』が発刊された。日本で最初に刊行されたプロテスタント教会150年史である。それは横浜海岸教会こそが、日本で最初に誕生したプロテスタント教会だからである。横浜海岸教会は「初週祈祷会」の出来事から誕生した。『横浜海岸教会一五〇年史』から該当部分を抜粋して引用する。「日本の正月2日、すなわち1872年2月10日の朝、塾生である篠崎桂之助がJ.H. バラを訪れ、自分たちも初週祈祷会を開きたいので、正午から1時まで会堂を貸してほしいと言ってきた。外国人たちはもう何年も前から世界のために祈っているのだから、自分たちもこの日本のために祈りたいというのである。バラは喜んで賛成し、出席を承諾した。」⁵一年の初頭を祈りから開始する、初週祈祷会の志がバラ塾で英語を学んでいた日本人青年たちから起こった。現在の感覚からすると初詣のキリスト教版のようなイメージが浮かぶが、日本社会で初詣が一般化するのはいずれ後⁶の

³ 前田勇樹「「琉球処分」の一四〇年」、前田ほか編『つながる沖縄近現代史』ボーダーインク、2021年、28頁。

⁴ 木村嘉男「「新橋～横浜間」時刻表の変遷をたどる」『鉄道150年物語 旅と鉄道増刊2022年10月号』天夢人 Tenmujin 発行、2022年、80頁。

⁵ 横浜海岸教会150年史編さん委員会編『横浜海岸教会一五〇年史』日本キリスト教会横浜海岸教会、2022年、42頁。

⁶ 現在のような初詣の風習は乗車員数増による増収を目論んだ鉄道会社のキャンペーンから日本社会へ定着した。「初出は明治十八年（1885）の東京日日新聞で、川崎大師について触れたものようだが、頻繁に使われるようになったのは明治三十年代になる」藤井青銅『「日本の伝統」の正体』新潮社、令和3〔2021〕年、22頁とされている。

ことであるので、時間の前後関係上その影響は考えられない。そして注目すべきは「日本のために祈りたい」との志である。個人的な事柄を祈願するのではなく、社会が激動する時代の只中で自分たちの国のために祈り、日本の将来を思う。初週祈禱会に集まった青年たちにとって「日本」が重大な関心事であり、これからこの国がどのような道を歩み、どのような形をとっていかうということが共通の課題意識であった。

この点において150年前に生起した諸事は偶発的同時性のようでありながら、近代日本の黎明期にあって「国を形づくる」意識という点で通底するものを看取することができる。無論、それぞれの出来事に関わった一人ひとりの社会的また実存的背景によって構想する「国」の形姿は異なり、相対立する事柄をも含んでいた。にもかかわらず「国を形づくる」ことが1872年当時を生きた人々に共通する時代精神であった⁷。

初週祈禱会の様子

前述のような時代背景の中で生起した初週祈禱会の様相については、植村正久が二十年後に回顧した文章に詳しい。

海岸基督教会は、社会の状況かくのごとくなりし最中に生まれ出でたるなり。明治三年の頃よりジェームズ・バラ氏、家塾を開きて英学を教授居られしが、その門に出入りするもの尠ならず、蓋し当時横浜は英学を中心にてありしかば、諸藩の士人、ここに集まりて多くの外人に就きて語学を修めたり。バラ氏の門に出入したる人々にして、今朝野の間に名を知らるるに至りたる官人、紳士許多あり、中にも数名の少年らは、英学を修むるの余暇、時々キリスト教の講談に耳を傾け居たり。この輩大いに感ずるところありて、明治五年正月（旧暦）バラ氏に乞うて、西洋人のなすがごとく、初週の祈禱会を開けり。これ日本国において、祈禱会を催すの初めなり。これを開くの日、バラ氏はいかなることに感じたりけん、壁上の黒板にイザヤ三十二章十五節の一句を取り、聖霊の濺がるる云々の文字を記し、使徒行伝を開講し、最も熱心にペンテコステの章を説明せり。会するものおよそ三十名、今まで祈禱の声を発することなかりし甲祈り、乙これに次ぎ、或いは泣き、或いは叫びて祈りするもの互いに前後を争うがごとくにありき。バラ氏は予て伝え聞きたるリバイバルのことを羨み、親しくその時節に遇うこともがなと希望せしことなきにあらざりしが、面りに一大リバイバルを見たる心地せりという。蓋し未だバプテスマも受けしことなく、公然祈りを

⁷ 植村正久は幕末から明治への時代状況を評して「日本国を改築するの端、ここに開け、一転して国家の組織を改め、再編して廢藩置県ちよう政治上の改革となりたり。時勢は更に方向を転じて、制度の変革、工業上の進歩を見るに至れり。論理上の順序としてこの次に起こるべき革命は、心霊上に関するものにあらずして何ぞや」と述べている（植村正久「日本帝国最首のプロテスタント教会」(明治25)『植村正久著作集6』新教出版社、1967年、73頁）。

なせしことなく、その間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし数名の少年が、俄然自ら希望してかかる有様に立ち至りしものなるをもって、その驚愕一方ならず。⁸

この文章から観察されるのは、会を包んでいる興奮と熱気である。バラによる聖書イザヤ書 32 章 15 節⁹と使徒行伝（使徒言行録）中ペンテコステ（聖霊降臨）の章（2 章）の講解がなされると、集った青年たちがそれぞれに声を発して祈り出したというのである。しかも「バプテスマも受けしことなく、公然祈りをなせしことなく」と記されているように、キリスト教洗礼を受けておらずそれゆえ当然に教会における祈りのことなど知識としては知る由もない者たちによる祈りであった¹⁰。加えて初週祈禱会当時は「切支丹禁制」がまだ解かれていない。1873（明治 6）年 2 月 24 日にいたって日本政府は、太政官布告第 68 号によりキリシタン禁制の高札を撤去した。キリスト教入信を可とする社会環境が整ってはじめてキリスト教信仰者が生まれたのではなく、禁教下に行われた初週祈禱会が日本最初のプロテスタント・キリスト教会設立への胎動となった。

押川方義にとっての初週祈禱会の意味

教会の存在しなかった地に教会が誕生する、いわば「無から有」の出来事が、「聖霊降臨」としての初週祈禱会を契機に生起した。そして宮城女学校創設に関わる押川方義が連なっていた。押川はキリスト教の洗礼を受け、日本基督公会（後の横浜海岸教会）設立に参加した。教会設立当日の様子は『横浜海岸教会一五〇年史』で次のように記されている。

洗礼式は、はじめに小川、仁村の両人が一人ひとりに試問し、のちに教師自らそれぞれ数個の試問をなし、生徒一同謹んで答えるという形で進められ、洗礼に及んだ。その日の受洗者は次の 9 名である。

竹尾録郎、篠崎桂乃助、安藤劉太郎（関信三の偽名で謀者）、進村（櫛部）斬、押川方義、吉田信好、佐藤一雄、戸波捨郎、大坪正之助。

この洗礼式が終わると、バラは「私が日本に来て以来、はじめての喜びであります」と言って両眼より大粒の涙を流したという。

そのあとバラは、朝の集会で長老に選ばれた小川を前に座らせ、教師ブラウンと共

⁸ 植村「日本帝国最首のプロテスタント教会」『著作集 6』73～74 頁。

⁹ 聖句内容は次の通り「ついに、我々の上に霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり園は森と見なされる。」引用は『聖書』新共同訳（日本聖書協会、1987 年）による。

¹⁰ 拙論「植村正久と P. T. フォーサイスの祈禱論—日本の教会における祈り理解の問題」『ピューリタニズム研究』日本ピューリタニズム学会、2012 年、40～48 頁においては、「初週祈禱会」から始まるキリスト教的祈りの特質を植村正久の理解に沿って論じた。

に按手の礼を施して次のように語った。

「神の命を受けて今日はじめての公会を建て、小川さんを長老の官に選びました。これもまた私共の力にあらず、ひとえに神のなすことなり、ゆえにいま我、耶蘇キリストに代わり、小川さんを長老と立て彼に長老の権を授けます。あなたたち今後は何事もこの人の命令に従い和睦してこの教えを広め、外国教師の手を借りずとも道を伝えてこの国を守るよう励みたまわんことを願います。」

バラ自身は「仮牧師」となった。元来バラは「日本人の教会は日本人の手で」と考えていたが、まだ日本人で教職にある者がなかったので、日本人牧師が誕生するまでの「仮」であるとの意味をこめたのであろう。¹¹

以上が押川を含む初週祈禱会からキリスト入信へ至ったメンバーの洗礼式と教会設立のなされた3月10日の様子である。なお洗礼者の中に「諜者」と注記された日本政府のいわばスパイが存在している。宣教師とそこに集まる人々の言動は諜者を通じて詳細に政府へ報告されており、同時に禁教下で記録を保存できなかったはずの教会活動について、その実態を克明に再現できるのは諜者報告書の存在による。

ところで、押川のキリスト教入信へ決定的な影響を与えたのは、宣教師バラの人格的感化と祈りの内実であった。「初週祈禱会——これはその後、一か月も続くのであるが——の中で、押川はバラの「神よ、わが日本を救い給え」という祈りを聞いた。これが押川とキリスト教との決定的な接点・出会いとなり、押川のキリスト教への回心となる」¹²と押川についての伝記に記されている。押川自身の言によれば「或る時バラ先生が祈禱の中に「吾国」と云ふ言葉を聞いた。嗚呼実に彼れの熱誠は、自国語と外国語とを混同するほどであった。自分は此の熱誠に動かされ真から心を改めた」¹³とある。ここから二つの点を指摘しておきたい。一つはバラの祈りを通して、押川における「国」理解に変革が生じたことである。先に述べたように、当時の時代精神として青年たちは「日本」という国の将来とそこに関わる自身の生き方を模索していた。その彼らにとって国と言えば「日本」であることは自明であった。けれどもバラの祈りは、押川が理解した国という前提を覆した。バラは日本のために熱心に祈って「吾国」と言う。アメリカ国籍のバラが、日本の国を我が事として自国として捉えている。そのことで押川は「真から心を改め」悔い改めたと語っている。換言すればバラにとってのアメリカ、押川にとっての日本といった国への意識が、キリスト教的超越の下に相対化され、キリスト教スピリットに基づいて各国の進路や将来を考究するという意識への転換が生じている。キリスト教伝統において重視される「主の祈り」に「御国を来たらせ給え、御心の天になるごとく地にもなさせ給え」との

¹¹ 『横浜海岸教会一五〇年史』45頁。

¹² 藤一也『押川方義 そのナショナリズムを背景として』燦葉出版社、1991年、37頁。

¹³ 藤『押川正義』39頁、出典は『東北文学』創立満二十五年記念特別号、明治四十四年七月と記。

言があるが、押川はバラの祈りに接することを通して、「神の国と我が国」のキリスト教的連関に人生の新しい進路を見出したのである。

もう一つの点は、押川のキリスト教入信において「国」意識が強すぎ、キリスト教の中心的使信であるイエス・キリストによる贖罪すなわち贖罪信仰が背景化してしまっているのではないか、信仰の実存的把握において希薄なのではないかという疑念である。結論的なことを先に記せば、そうした疑念ないし批判はキリスト教をめぐる現代日本社会の状況に引き付け過ぎるところに生じるもので、押川の入信に対しては当を得ていないと考えられる。繰り返し述べてきたように国の将来と自らの人生の将来とが一体化して意識されていた時代状況にあっては、国のことを考えることは何よりも真剣に実存的であったからである。さらに傍証としては先の引用で示したように、押川らの受洗にあたっては教師と信徒によるキリスト教信仰についての試問がなされ、それへの誠実な回答と誓約をふまえて洗礼式が執行された事実においても贖罪信仰が不明なままで洗礼を受けたとは考えにくい。

またこの洗礼がキリスト教禁教下であったという事実も重要である。「浦上四番崩れ」から時間的に遠くない状況下で、イエス・キリストの十字架へと復活の信仰に対する確信がないままに、キリスト教入信を命がけで決断することは不可能である。「当時、キリスト教は悪の宗教であり、とりわけ愛国心を破壊するという見方が広く行き渡っていた。そのような宗教への信仰を公にすることは、あらゆる財産と世的な希望を完全に失い、時には死の危険を伴うことも意味した。……彼らは世的な地位と栄誉の見込みか、十字架につけられたキリストの謙卑かどちらかを選択するよう求められた。しかし彼らは後者を選んだ」¹⁴と後年に宮城女学校や東北学院で押川と共に活動した、藤生金六は述べている。社会的な不利益や不名誉さらには死に直結しかねないキリスト教入信を支えたのは、十字架と復活のキリストへの信仰であった。むしろ押川はキリスト教信仰を狭義での個人的実存の枠内にとどめなかった。説教の筆記録で次のような内容が残されている。「霊の人とは、クリストの如き人を云ふことで、クリストの如くなるとは、世から離れるのではなく、世に行わたるのである。商売もし、事業もし、学問もし、政治もすることであるが、然し其の商売、事業、学問、政治に一身を埋めるのでなく、更に大ひなる目的を以て此等の務を尽すものである。……一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人が即ち霊の人である。仕事に拘つらはず、習慣に拘つらはず、肉に拘つ

¹⁴ K. Y. Fujii, "The Yokohama Band" *The Japan Evangelist*, December, 1895. pp.87-91.

藤生金六は、相馬黒光『黙移』によって広く知られるようになった宮城女学校「ストライキ」事件に関わっており、E. R. プールボーによる1892年の書簡の中で「藤生氏は、手紙の冒頭でこの紛争の源と言われた人物です」(『E. R. プールボー書簡集』学校法人宮城学院発行、2007年、231頁)と名指しで非難されている。藤生は東京・下谷教会牧師時代には田村直臣『日本の花嫁』弾劾の際の日本基督教会大会議長であった。またその後は会津伝道に従事し、若き日の野口英世に洗礼を授けている。

らはず、心の霊の為に尤も考え、心の霊の為に尤も尽力する人が即はち霊の人である。」¹⁵ この説教は誌面掲載年からみて宮城女学校や東北学院の設立と運営の大事業をなしている押川の弁である。さらに実業界、政界で活動していく押川自身を語っているかのような言葉である。社会のどの部分で活動している時でも押川の根底にあったのは「一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人」という姿勢であった。ここでの「霊」とは聖書に記され、キリスト教信仰における三位一体の一位格である聖霊を指している。上なる聖霊に導かれることを心得るとは、押川が若き日に経験した初週祈禱会における祈りの出来事の言語化である。そして人生で果たすべき使命についての祈りが、「一身を埋めるのではなく、更に大ひなる目的を以て此等の務を尽す」神の国建設という大目的のため calling の務めを行うこととして語られている。祈りから始まった押川のキリスト教的使命観が提示されている。

現代の私たちと「初週祈禱会」

視点を150年前から現代に戻して、「初週祈禱会」から現在の宮城学院に受け継がれる事柄を考えたい。年頭にあたって一同が集い聖書を開き祈るという初週祈禱会、日本プロテスタント教会の歴史冒頭にあった出来事は、現在の宮城学院にも教職員新年礼拝として受け継がれている。先に資料から確認した「初週祈禱会」の様相と宮城学院新年礼拝とを比較するならば、顕著な違いは参集者個々人による祈りの発声の有無という点にある。けれどもキリスト教信仰の本旨からすれば、祈りが有声であるか無声であるかの相違は本質的な問題ではない。一年が巡り来る毎に実施される新年礼拝が形式的年中行事ではなく、この共同体の中で自らに委ねられている務めと諸事を究極的に支えかつ高次の目的が何であるかを一年の劈頭にあたって確認する。押川の表現に依れば「一事一物に執着せず、何事をするにも、一等上の大ひなる霊の心得を以てする人が即はち霊の人である」ことを再確認するのが礼拝の場である。それは宮城学院の源流にある「初週祈禱会」と現在の宮城学院とを精神的霊的に直結させ、建学の根底にあるキリスト教の使信を確認することでもある。またそのことはキリスト教徒であるか否かに関わらず宮城学院の共同体全構成員に関わっている。なぜなら「初週祈禱会」の出来事が伝えているのは「未だバプテスマも受けしことなく、公然祈りをなせしことなく、その間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし」者たちに祈りと志が生起した事実だからである。

¹⁵ 川合道雄『武士のなったキリスト者 押川方義 管見（明治篇）』近代文藝社、1991年、52頁。引用部分に先立って「明治二十三年十一月十九日の「女学雑誌」（第二四一号）「霊の人の説」（安藤たね子筆記）は押川方義の説教を抜粋、掲載したものだ」と出典が記されている。同書著者・川合道雄の父が川合信水であり、東北学院に入学してから押川を師として尊敬し、交流が長く続き多くの書簡が交わされた。信水は「基督心宗教団」を設立する。その活動内容については、マーク・R・マリズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳、トランスビュー、2005年、特に111～127頁に詳しい。

そして「初週祈祷会」と現在を考えることは、150年前に構想された「国のかたち」が歴史的過程や幾多の社会変動を経て、転換期が到来しているという現実を認識し、将来への方策を構想していくことでもある。150年という節目は回顧と展望の機会でもある。このことを百年前に指摘していたのは植村正久である。「教会の五十年、鉄道の五十年」という文章で「鉄道満五十年の記念は必ずや、事実上後の進歩の機会を作り、その面目を一新する端緒となるであろう。況や教会五十年の回顧とその期間における経過の検閲とは、より深き意味において、後の進歩発達之机を与うべきである」¹⁶と述べ、さらに「日本におけるキリスト教の五十年」で論を進めて、日本のキリスト教会50年の歴史において「機会はいかに用いられたのであるか。彼らなせしことは何であるか。なさざりしことまた何であるか。神の恩寵に照らしてこれら功罪を数え来たり、かつ感謝し、かつ悔やみて、志を立て、新たなる進歩の線路を敷きて、五十年の経験を活かすは、いわゆる恩寵の手段の最も有効なる応用であろうと信ぜられる。……吾人は時の徴候を解釈して、歴史の教訓を味わわねばならぬ」¹⁷と訴えた。鉄道の歴史を振り返って政府が今後の鉄道伸展と交通政策立案を開始している。鉄道にしてそうならばキリスト教会はそれ以上に、この間の歴史を批判的視点も伴って検証し、未来に向けて伝道政策を立案すべきことが語られている。

そして横浜を起点として全国へと広がった鉄道とキリスト教会は、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響を受け、より長期的には日本社会の少子化傾向と人口減という社会変動へ直面している。昨今様々に報道されているように、日本全国への鉄道網を担っているJR各社は地方路線の収支悪化によって苦境に立たされている。企業体として経営構造改善のためには地方の不採算路線での設備縮小さらには廃線もやむを得ないとされる状況にあり、その場合には東北地方の鉄道路線が甚大な影響を受けることは免れ難い¹⁸。そして150年の歴史で横浜を起点として全国に路線を伸ばした鉄道と、鉄道を利用した伝道者の活動によって全国へ枝が広がられていった教会¹⁹は、現在において社会状況の変化による同様の困難に直面している。各地の地方教会が過疎化・高齢化による成員減少また専従伝道者を招聘不可能な状況に向かっている。教会はこの現状と未来予測に対してどのような将来構想を提示していくのか。企業の経営的判断と類似した思考により地方の小人

¹⁶ 植村正久「教会の五十年、伝道の五十年」(大正10)『植村正久著作集2』新教出版社、1966年、106頁。

¹⁷ 植村「日本におけるキリスト教の五十年」(大正10)『著作集2』104頁。

¹⁸ 先にJR東日本が公表した路線・区間ごとの経営情報によれば、100円の収益を得るために要する費用金額を示す「営業係数」(100未満であれば黒字、100以上なら赤字)において2020年度に「陸羽東線鳴子～最上22149、磐越西線野沢～津川17706」(松本典久「とても厳しい鉄道会社の現状」『ニッポンの鉄道を応援する方法100 旅と鉄道2022年11月号』天夢人 Tenmujin 発行、2022年、14頁)と東北地方の鉄道路線が不採算路線・区間の上位に位置している。

¹⁹ 鉄道を利用したキリスト教伝道活動の歴史的エピソードについては、拙論「伝道—〈道を伝えること〉と〈道で伝えられること〉」『聖学院大学総合研究所 Newsletter』vol.19-4、2010年、4～5頁参照。

教教会を廃止し続ける対応に終始するならば、やがて広範囲な教会不存地域が出現し、そのことはキリスト教学校とりわけ地方に存立する学校を直撃することになる。植村が鉄道と教会 50 年の歴史時点で述べたことと同様、150 年の今にあっても「機会はいかに用いられたのであるか。彼らなせしことは何であるか。なさざりしことまた何であるか」を吟味検討し、「志を立て、新たなる進歩の線路を敷」こうとする神学的かつ伝道社会学的政策の立案が求められている。

地方とりわけ東北の地にあるキリスト教学校が上述課題を考究するにあたり準拠枠となり得るのは「東北を日本のスコットランドに」という押川方義の言である。前後を含めた文脈としては「今日は色々、有益なる話を本多〔庸一〕君や服部〔綾雄〕君にきゝまして、東北に身を委ねて伝道するのは貧乏籤を引きあてたものであると云ふ事をきゝましたが何んぞ謀らん自分は、此の東北の地をして日本のスコットランドたらしむる覚悟である、決して貧乏くじとは思わない……」²⁰と語っている。押川はプロテスタント・キリスト教と東北の地とが結び合わされることによって、「白河以北一山百文」的な価値観を超える新しい可能性、歴史と日本の将来へ貢献する道筋を見出し、この一言へ込めた。「スコットランド」という表現で、イギリスの「国のかたち」を日本における「国のかたち」へ応用することが考えられている。イギリスはより正確な国名としては「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」であり、それぞれ独自の歴史や文化を有するイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドが連合して一つの主権国家を構成している。それになぞらえて押川は東北地域の文化的歴史的固有性を積極的に肯定的に提示し、それを通して日本という国が各地域の歴史的・文化的固有性や多様性を併せ持つ「国のかたち」を形成することを提唱した。それは近代日本政治が中央集権的で単一的な国のかたちを志向し、その結果として東北を国内植民地的な取り扱いとするのとは別様な「国のかたち」の提示であった。しかもスコットランドは宗教改革者ジョン・ノックスはじめ、プロテスタント教会の中でもとりわけ改革長老派信仰の基盤を有している。その意味で同じイギリスでも英国国教会の中心地であるイングランドとは異なる宗教文化を形成している。押川は東北の地と改革長老派キリスト教との邂逅により「此の東北の地をして日本のスコットランドたらしむる覚悟」を示した。この精神を宮城学院は継承している。「多文化共生」という現代グローバル世界共通課題を、「東北」地域の文化的歴史的固有性の学問的探求を通して社会へ発信していく。それが「初週祈禱会」において 150 年前に押川が見出した、キリスト教による新しい「国のかたち」を現代において受け継ぐことになる。

※本稿は宮城学院キリスト教講座「宮城学院の源流をたどる 初週祈禱会という出来事」(2023 年 1 月 10 日)での発表を文字化し大幅な加筆修正を加えて改題したものである。

(まつもと しゅう / 宮城学院女子大学一般教育部准教授)

²⁰ 藤『押川正義』300～301 頁、初出は『東北文学』創立満二十五年記念特別号、明治四十四年七月。